

マイクロファイナンス利用者のエンパワーメント過程

——BRAC に関する福祉社会論的研究

A Preliminary Study of Empowerment Process among Users of Micro-finance in BRAC:
from the Perspective of Studies on Welfare Society

木下 康仁*

Yasuhito Kinoshita

Abstract

The purpose of this paper is to explore the process of empowerment among users of micro-finance in BRAC within the theoretical framework of studies on welfare societies. The interview data, of which those on micro-finance were utilized in this paper, were collected by four members of the project, "A Welfare Sociological Study of BRAC", on August, 2010 in Bangladesh.

The paper discusses first the theoretical framework of this research project, then presents a brief background history of Bangladesh and BRAC, followed by a short summary of the main characteristics of the BRAC activities and the methodological perspective used to study the BRAC model. After that, 8 case studies of successful micro-finance users are presented in brief and the data are interpreted in terms of patterns of loan use, participation and involvement in a Village Organization, generational relationship between them and their children, and the nature of being a member of a Village Organization.

Keywords : Bangladesh, BRAC, micro-finance, empowerment process, welfare society

I はじめに

本稿の目的は、福祉社会論の立場から世界最大規模とされるバングラデシュの NGO, BRAC を対象に、その基幹事業であるマイクロファイナンスの利用者に焦点を当て経済的及び社会的エンパワーメントのプロセスを探索的に検討することにある。包括的事業体である BRAC には福祉社会研究において提起されている諸特性の多くがみられるだけでなく、統合的に実践されており、事例としての詳細な検討に値する。

研究プロジェクト「BRAC に関する福祉社会論的研究」のメンバーは、エンパワーメント・プロセスを基本概念とし具体的にはマイクロファイナンス、ノンフォーマル教育 (non-formal education)、保健ボランティア (health volunteers)、母子保健を課題テーマに2010年8月に1週間の

*立教大学 AIIC 所員、社会学部教授

予備調査を実施した¹。本稿はそのうちマイクロファイナンス利用者に関するものであり、他のテーマに関しては後掲のジョマダル、松繁、阿部論文がそれぞれ取り上げている。各論文は、今後の本格的な研究展開に向けた論点の抽出に比重をおいている。

はじめに、研究プロジェクトについて説明する。

II プロジェクトの概要と理論的視座

バングラデシュに関する研究は通常開発援助論、社会開発論からアプローチされるのであるが、本プロジェクトは先進福祉国家に関する研究系譜から導かれる主要な理論的、実践的課題をBRACの事例研究により深化させることを狙いとしている。社会保障制度の国家間比較あるいはその政策面のプロセスを取り上げるのではなく、メゾレベルに照準化し「自助・共助・公助」の変動関係における共助領域の可能性を検討する。この領域はいかなる社会にあっても人々の日常生活が営まれる世界であり、分析上相互行為的視点が導入可能となる。

すなわち、バングラデシュを福祉国家への途上国と位置づける立場ではなく、BRACという特定のNGOを研究することで、持続困難な局面にある日本を含めた福祉国家群の抱える諸課題に対して新たな理論的知見を求めようとするものである。そこに両方で共有しうる新たな共助型社会像の可能性を検討する。先進国・途上国の枠組みとは別の、グローバル化世界における同時代的課題認識からのアプローチである。

そのためには、福祉社会に関する研究状況をごく簡単に要約しておく必要がある。大別して福祉国家の政策研究系譜と援助実践・市民参加（NPO等）の研究系譜で展開してきているが、福祉国家の困難状況は公的責任と私的責任の限界をたどりながら、両系譜が合流しつつ共助領域の可能性の探究に重点をおいてきている。

前者の系譜は、社会保障制度を介した国家による富の再配分を前提に近代産業社会の成熟化という歴史認識を共有する。代表的な研究としては、福祉国家を資本主義モデルから類型化したエスピン・アンデルセンの福祉レジーム論[Esping-Andersen 1990]や、利益団体間の協調主義的協議モデルであるネオ・コーポラティズム論[Mishra 1974, 1984]が挙げられるが、低迷する経済と人口の高齢化の影響を受けた社会保障制度の財政危機の中でいずれも理論モデルとしての有効性が減少し、代わって多様な供給サイドの視点に立った福祉多元主義が提起されるに至る。「公・民」、「営利・非営利」の境界を越えた活動主体による協働連携による新しいモデルが地域社会を中心とした中間領域において模索されている。

本研究プロジェクトとの関連ではとくに東アジアを含めた国際比較と福祉国家形成史も踏まえた武川（2007）の枠組みは総合的視点を提供している。ただ、福祉国家研究は成熟化した国家の限界からの発想となるのに対して、本研究は国家を相対化し「公助・共助・自助」のバランスにおいて現実に共助部分が他の二者とは相対的に拡充されている例（バングラデシュのBRAC）を取り上げる点で新たな研究展開となる。

一方、援助実践・市民参加の研究系は、ミクロな対人的ケア実践をめぐる研究に加え近年では

市民参加型 NPO の活動研究へと拡大し、介護保険事業の地域展開や法定計画である地域福祉計画の策定と実行を受け、地域における福祉多元主義の現実的展開という性格を強めてきている。

換言すると、福祉社会研究の現段階における到達点の一つは、公助と自助の限界から共助領域の可能性の検討というテーマの浮上であり、その観点にたつと複合的、包括的事業体である BRAC は理念的にも方法論的にも福祉多元主義に包摂される主要要素に対応すると考えられ、社会の中間領域における共助に関し広範囲な検討を可能とする。

III バングラデシュと BRAC²

バングラデシュと BRAC について詳細な説明はここでの目的ではないので、ごく概略のみ提示するにとどめる。

バングラデシュはパキスタンとの独立戦争を経て1971年に建国された若い国であり、北海道の約1.7倍の国土に1億6000万人の人口（2008年）を抱え、人口密度は世界屈指である。首都ダッカを中心に近年縫製産業が経済成長を牽引しているが、依然として世界の最貧国の一つである。

国民生活を支える国家の行政制度が十分に整備されない状況で自然災害が頻発することもあり、同国は外国政府、民間財団等の国際援助に大きく依存している。その結果、現在では非常に多くの大小の NGO が活動する国となっており、地方農村地域においては NGO の存在は日常風景の一部として定着し、人々の生活面で大きな役割を果たすまでになっている。

BRAC（当初名、Bangladesh Rehabilitation Assistance Committee、1973年より旧名 Bangladesh Rural Advancement Committee、現在の正式名称は BRAC）は独立直後の1972年に難民帰国支援を目的に設立され、1973年に NGO として農村地域の貧困女性を対象に貧困軽減に向けた事業を開始し、その後多角的な事業展開に成功し規模が拡大する。2008年には従業員数約14万人、総予算6億米ドル、3800箇所の拠点事務所を全国に展開している。財源は当初の西側諸国からの援助依存から、独自の収益事業の活発化により8割まで自己財源化を達している。2001年には中小企業融資に特化した BRAC 銀行、そして、人材養成の高等教育機関として BRAC 大学を設立し、NGO として他に例を見ない大規模な非営利・営利混合の包括的事業体となっている。また、独自に構築してきたモデルをもとにアフガニスタン、パキスタン、スリランカやタンザニア、ウガンダ、スーダンなどのアジア・アフリカ（AA）諸国への援助事業も展開しており主要な南南援助例となっている。

国家行政との関係では領域によって「補完、先行、競合」の複合的側面をもちつつ、BRAC は同国において最も影響力のある民間組織である。

BRAC は NGO として世界最大規模であるだけでなく、住民生活を支える事業の幅広さ、ボトムアップの民主的な事業展開方法、教育重視、能力開発、非政治志向性など理念と方法論に特徴があり、事例としての総合的検討は共助型社会の可能性に関し新たな知見を導くと考えられる。

IV BRAC モデルの特徴³

包括的事業体である BRAC の特性を簡潔にとらえることは困難であり、また、立場や関心によって取り上げ方も異なってくるが、本稿では事業種類と相互関係、組織論、方法論、そして、基本理念の四点でまとめてみたい。

BRAC の基幹事業は、農村の貧困女性を対象にした貧困軽減を目的とするマイクロファイナンスである。そして、利用者がローンを有効に活用し収入を拡大するための直接、間接のさまざまな支援の提供である。例えば、講習会の開催や相談対応、養鶏を始める場合には健康な幼鳥の供給、ワクチン接種とそのための冷蔵管理網の整備、卵の販路など一連の課題があり必要に応じて BRAC がそのためのシステムを独自に開発してきている。小規模なものから乳牛飼育と牛乳販路や余剰牛乳の加工工場と乳製品の販売、農村部の手工芸品のダッカにおける独自店での販売などの広域規模のものまで多岐にわたる。ローン利用者の必要性を受けて BRAC が生産、流通、販売まで事業システム化していくという展開プロセスがみられる。

農村部においてはマイクロファイナンスを木の幹とすれば、生活面の改善を意図したさまざまな枝が出ている。健康管理のための保健衛生活動や公立小学校に就学困難な児童を対象にした独自のノンフォーマル学校 (non-formal school) における教育活動、さらに人権やジェンダーに関する啓蒙教育など複合的な展開となっている。

次に組織論であるが、特徴は二点にまとめられよう。第一は、末端から本部をつなぐ分節的連携と呼ぶ組織構成であり、基本単位である村内の借入者委員会 (Village Organization, 以下 VO) から地域レベル (area level)、地方レベル (regional level)、そして本部における事業担当別責任者制 (program coordinator) と理事会、さらに上級理事会という構成であるが中央集権の組織論ではなく上位レベルは指導を提供するが基本的には各レベルで問題解決に取り組むという機能連携の組織論をとっている。この方式で全国規模で全体の統制がとれ、かつ、運動体的性格を保持している。権力を分散化しつつ機能的であり、統制を取りつつ事業拡大している。

第二の特性は、基本単位である VO である。マイクロファイナンスが幹であるとすれば VO はその木を支える土壌にあたる。幹が育ち枝葉が茂るためには母体となる VO が決定的に重要となる。マイクロファイナンスの利用の条件である 5 人による連帯制度に比べても、VO の役割は広範囲に及んでおり BRAC の事業展開全体の要であり、個々のメンバーと地域社会との連結点に位置づけられる。

農村の貧困女性をターゲットとし貧困軽減を主たる目的とするマイクロファイナンス事業を開始するためには、一般的なパターンとして、まず BRAC のスタッフが農村に入り事業立ち上げのリーダーになれそうな貧困女性を探し小グループを形成する。その後、大小さまざまな集会を開き、問題解決のためには組織化が必要なことを説明し、30人から40人程度の女性からなる組織を村に作る。なお、マイクロファイナンスに参加できる資格、すなわち、貧困の定義になるが、半エーカーの土地しか所有せず、かつ、家族の 1 人が年間最低100日は日雇いであることとされている。

VO は毎週集会をもつ。所定額の返済と預金为主目的であるが、16か条の教えの口誦をはじめ、保健、人権、ジェンダーなどに関する学習や講習がこの機会に行われる。講師である BRAC スタッフの説明を受け、要点を反復的に唱和する方法がとられている。近隣住民である女性たちが定期的に交流する機会にもなるので、結束の強化につながる。

VO が果たしているもう一つの重要な機能は、そのメンバーが基本的に地域の人材源になっていることである。保健ボランティア (health volunteers, HV: 松繁論文参照) やノンフォーマル学校の教員 (ジョマダル論文参照) の人材はここからリクルートされていく。VO はマイクロファイナンスが開始された時から組織され、現在では BRAC が主導する地域活動の母体となっている。ノンフォーマル学校の開設と運営には通学する子供たちの父母に参加してもらい、さらに、地域の指導的有力者層にも協力を要請している。組織展開の効率性だけでなく、むしろそれ以上に地域住民をアクター化しコミュニティとしての改善を図ろうとする BRAC の狙いが読み取れる。

第三の特性は組織論を支える方法論であり、失敗から学ぶオープンな姿勢 (「学習する組織」) と人材育成のための強固な研修制度である。ジョマダル論文が教員養成について説明しているように、必要な人材は外部から人材を投入するのではなく、地域住民の中から調達し継続的研修により能力形成させていくのが人材に関する BRAC の基本的方法である。コミュニティの中で事業を担える人材を養成しているのでコミュニティの自律性と持続可能性を強化していく。BRAC の組織論を分節型連携と呼ぶのは全体の組織構成についてだけでなく、最も重要な人材に関するこの理由にもよる。

事業展開に必要な人材を地域住民の中から求め、独自の研修で能力形成を図る BRAC の方法論は汎用性が高く、アジアやアフリカ諸国への支援実績において検証されてきている。

権力分散型組織論や徹底した研修制度と並ぶ、もう一つの主要特性が研究評価部門 (Research and Evaluation Division: RED) の存在である。BRAC 設立直後の1975年にはすでに設置されている。RED に関してはそれ自体が研究テーマに値するほどユニークであり、現在担当分野別に60名ほどのスタッフを有し、単体の NGO が抱える研究機関としては屈指の規模と活動内容を誇る。BRAC は実施中の事業の実践評価や新規事業の開発とその実現可能性などアカデミックな研究よりも実践研究を重視しており、その役割を RED が担っている。この部門は現業部門とは利害関係にもなりやすいので研究活動の独立性を保持するため組織的には理事会直属である。また、評価研究の結果は公表されるだけでなく、改善案とともに関連部署に報告される。ただし、強制力はもたないとされている。本稿との関連で最後に指摘しておくべきは、RED は当初から BRAC の総予算の1.5%を配分されている点である。この比率は BRAC の予算規模が拡大した現在でも変更されていない。

最後の特性として、これらの特性を支える基本理念があげられる。フレイレによって提唱された「意識化 (conscientization)」が BRAC によっても強調されているが、筆者の解釈ではその背景にある人間観と、貧困軽減を目的としつつ同時に個人の問題をコミュニティの課題としていく志向性が重要である。意識化とは、簡単に言えば、貧困で文字が読めなくても自分のおかれている

状況を理解できるようになれば、自ら問題解決に向けて動き出す力がすべての人に備わっているという考え方である。したがって、その理解のための広い意味での教育が不可欠となる。人間の能力に対する信頼が BRAC のすべての活動の根幹にある。そして、変革のエージェントとして女性、とりわけ農村貧困女性をターゲットにしているのである。

V モデル検証の概念と方法

福祉社会論の研究が直面している理論的、実践的課題を踏まえ、BRAC の特性を以上のように整理すると、両者を連結する分析上の視点としてエンパワーメントの概念が設定できる。日常生活にかかわる問題解決、課題達成に向けた当事者の力量形成プロセスが分析対象となる。エンパワーメントの詳細な概念的検討はここでの目的ではないので、この概念が系譜的にフレイレによって提起された点と先述した福祉多元主義の下でも主要概念となっている点を指摘するにとどめる。分析的概念としてだけでなく理念的概念としても、人間の能力や可能性への信頼、当事者による問題解決力、個人レベルだけでなくコミュニティの在り方の問題をも射程に含む点などは根本において両者で共有されている。

少し説明すると、意識化の概念やその前提にある人間観は我々とは直接結びつくものではなくバングラデシュや他の途上国の貧困層にかかわるものと理解しがちだが、筆者の立場は異なる。これらを経由することで実は我々の人間観の肥大化と貧弱化を認識でき（再認識化）、同時代性を介して共通の土俵に立てる。完成度を高めた近代的システムは行政制度であれ商品やサービスの供給であれ人間をそれに適した枠に限定するのであり、自由と選択があるようでありながら人間が本来的に有している問題解決力を認識できなくなる。例えば福祉国家が制度的に規定する社会的弱者と呼ばれる人間像、すなわち被生活保護者、障害児・障害者、高齢者、要介護者等々の人間像が我々の思考前提に深く浸透していることに気づきにくくなっている。分断化された人間像がかわり、人間の可能性をトータルに捉えなおすために意識化の概念は我々にとって重要な意味をもつのである。エンパワーメントの概念はこの前提の上に位置づけられる。

分析的にはエンパワーメントの概念をコミュニティまで適用することでアクター、相互行為、日常生活の視点から共助の場としての地域社会が焦点化される。個人におけるエンパワーメントとコミュニティのエンパワーメントのそれぞれのプロセスと両者の相互的影響プロセスの理解が分析目標となる。

こうした認識と問いの設定により、福祉多元主義のもと地域社会において多様なアクターが活動する先進福祉諸国が直面している課題状況と、バングラデシュにおける BRAC の活動状況とが並置可能となり、現象面の対照性を超えて相互に学びあえる地平が拓かれると考えられる。

エンパワーメントをプロセスの視点で明らかにし、両者の文脈において相互に了解可能とするためには、研究上次の二点が有効であろう。時間の視点と、研究方法と記述スタイルの工夫である。時間に関しては、個人における比較的短期的エンパワーメントだけでなく人生の視点からのライフコースとエンパワーメントの関係、さらには世代的関係とエンパワーメントの关系到分け

ることができ、同時にこれらの時間軸にそってコミュニティの変化が相互影響的視点から理解される必要がある。国あるいは広域的な社会経済政治的变化は背景文脈と位置づける。研究デザインとしては横断的研究だけでなく可能であればベースラインからの縦断的研究が望ましい。

研究方法に関しては、貧困状態が改善されていくプロセスにおいて当事者の意識や価値観がどのように変化していくのか、そのプロセスにおける葛藤の諸相と調整方法を家族関係だけでなくコミュニティとの関連で理解することが主目的となるので、数量的方法よりも質的研究法、とくに通常のヒアリング目的のインタビューではなく当事者が認識変化を十分言語化できない場合にその作業を促す、対話型の、それ自体がエンパワメントの要素を内包するアクティヴインタビューの手法〔Holstein and Gubrium, 1995〕や、コミュニティの住民の視点を深く理解できるフィールドワークが適している。

また、その結果は解釈的記述方法であるエスノグラフィーとなろう。

VI 事例の探索的検討

本稿においては以上述べてきた研究構想の枠組みのもと、まずマイクロファイナンス利用者のエンパワメント・プロセスを探索的に検討する。2010年8月に実施した予備調査のうち、ガジプール県の二か所の BRAC 地域事務所で行った8名の面接データを使用する。インタビューはプロジェクトメンバーの4名（木下、松繁、阿部、ジョマダル）が共通のインタビューガイド⁴を用いて行い2名ずつ担当した。ジョマダル以外は英語・ベンガル語の通訳を介して行った。

インタビュー協力者は、マイクロファイナンスを有効に活用している利用者を推薦するよう BRAC 側に事前に依頼した。他の選定条件はつかなかったが、これは次の理由による。農村女性の貧困軽減を主目的とする BRAC の提供事業は包括的であるが、最も重要な点はマイクロファイナンスの利用による経済状況の改善である。つまり、収入の拡大による経済面でのエンパワメントがそれなりに達成されていることが、保健衛生、人権、教育などマイクロファイナンス以外の BRAC の事業への参加や、基盤組織である VO への運営参加やリーダー的役割につながる想定すれば、まずはマイクロファイナンスの成功事例をインタビューの対象とすることが適切であると判断した。エンパワメントの方向として逆のプロセスはみられないか、みられるとしても例外的ではないかとの想定による。

以下、8名についての概要である。事例 A から H は年齢順としているが、正確な暦年齢は成人の場合日常生活上必ずしも定着していないようで、前後の文脈から推定したりインタビューの中で整合していないと思われる場合も含んでいる。

〈事例 A〉

20歳、10歳で結婚。夫30歳、5歳と2歳の娘2人と義父母の6人家族で、養鶏業を営む。現在2500羽を飼育し毎日1600個の卵を出荷している。

現在のマイクロファイナンスの借入額は4万8000タカ（1タカが約2円）で、毎週1200タカの返済と100タカの預金をしており、あと12回で全額返済となる。最初の借入は5年前、1万タカから始めた。ロ

ーンは当初から家業の養鶏業のために使っており、ヒナの購入や予防接種に使った。

この5年間の生活の変化として、鶏の数の増加と冷蔵庫とソファの購入を挙げた。

将来は事業を拡大し街の中心部に洋品店を持ちたいという。娘には医者になってほしいと希望している。

BRAC のプログラムはマイクロファイナンスしか利用していない。VO には返済のために出ているだけである。

〈事例B〉

30歳、16歳で結婚し、18歳の息子と13歳の娘、40歳の夫。息子は結婚しており息子夫婦も一緒に同居している。数日前に初孫が誕生。娘はすでに婚出して近くに住んでいる。息子は縫製工場で働く。自身と夫で1000羽の養鶏と4頭の乳牛を飼っている。日に6リッターの牛乳がとれ、夫が市場で売っている。

マイクロファイナンスは現在5回目のローンで6万タカを借入し毎週1500タカの返済と50タカの貯金をしている。完済まで残り14週分である。このローンでヒナ鳥を購入した。最初の借入が6年前、2万タカ、2回目が3万5000タカ、3回目が5万タカ、4回目が7万タカ、そして現在5回目である。3回目のローンで乳牛を3頭購入した以外は、すべてヒナ鳥の購入に充てている。貯金は2万5000タカあるが、これは将来への備えとしている。

ローンを利用するようになってからの生活の変化として、最初の借入で養鶏業を独立して営むことができ、4年前に比べ現在では家が3軒に増え養鶏小屋も二つに増えたこと、また、魚や肉を毎日食べられるようになったこと、娘の結婚の際にテレビ、ソファ、タンスなどを持たせることができたことを挙げた。

将来は、工場で働いている息子の仕事が大変なので20万タカ借りて店を持たせたいと考えている。その方が息子も楽になるので長く働けるからという理由である。

BRAC に関してはマイクロファイナンスの利用だけで他のプログラムには参加していない。VO には毎週出席しているが、返済のためで、養鶏や乳牛の世話で忙しくプログラムに興味を感じながらも参加できない状態である。

〈事例C〉

45歳、13歳で結婚し、現在70歳を越した夫、30歳の息子とその妻、5歳の孫（男）との同居である。21歳になる娘は3年前に結婚して家を出ている。夫は農業、自身は乳牛の世話、息子は自動車の整備士をしている。

マイクロファイナンスは2006年から始め、現在第5回目の借入の予定。初回は1万タカで乳牛を1頭購入、2回目は2万タカ、3回目3万タカ、4回目4万タカとローンの額を増やしてきて5回目として5万タカの借入を申請する直前であった。一貫して乳牛の購入に充てている。牛乳の販売が収入源で、毎週1000タカの返済、自分の手元に50タカを残すことにしている。

孫が BRAC のノンフォーマル学校に通っている。

〈事例D〉

49歳、50歳を超える夫と15歳と12歳の娘、8歳の息子の5人家族である。夫はリキシャのガレージを経営している。マイクロファイナンスを利用する前は、夫は日雇い労働者であった。

最初のローンが1980年、19歳の時であるから30年の利用歴である。最初2000タカを借り、リキシャを購入した。現在のローンは8万5000タカで、毎週2125タカの返済、50タカの貯金のパターンで残りの返済回数もわずかとなっている。リキシャと運搬用リキシャを購入し人を雇ってガレージを経営している。貯金額は2万9000タカある。冷蔵庫も購入できた。

彼女の属する VO は30名で構成され、彼女は副会長としてグループのまとめ役となっている。メンバ

一の困りごとに対応し、集会では話し合いの進行役をつとめている。

マイクロファイナンスの利用後、経済的余裕ができ十分な食事もとれるようになり、子供たちもすべて公立の学校に通わせた。また、BRACの人権教育を受け、娘の結婚にはダウリ（持参金）を持たせなかった。保健衛生教育のプログラムにも参加している。

〈事例E〉

40歳代、50代の夫、長男夫婦と6歳の孫との同居。娘と次男は結婚して家を出ている。16歳のころに結婚。マイクロファイナンスのローンで灌漑事業をしている。これまでの延べ借入額は5万タカで毎週1250タカを返済している。灌漑の機械購入のために3万タカが必要であった。

VOでは会長を16年間つとめており、25名のメンバーをまとめる役割を担っている。マイクロファイナンスの概要を説明し、メンバーへの助言をしている。返済困難なメンバーがいれば他のメンバーが協力して返済を肩代わりし、後にその人から返してもらうなどの対応もある。

〈事例F〉

40歳代、18歳の時に結婚、2人の息子をもうける。25歳の長男は現在、ダッカで大学院修士課程に在籍中、19歳の息子は家の商売の手伝いをしている。米、ミルク、その他の食料品を主に扱う雑貨店を営んでいる。夫とは14年前に死別（狂犬病）。その40日後にBRACのマイクロファイナンスを利用しはじめる。

事業開始当初の一日の売り上げは500から700タカだったが、10数年を経た現在では一日当たり1500から1700タカの売り上げとなっている。今後は、店を任せられる人を見つけて店舗数を増やしていきたいと考えている。

収入を得るようになってから衣服など自分のための買い物ができるようになった。以前は日々の生活のことで精いっぱいだったが、今では店の内装をきれいにしたいなど気持ちにも余裕がもて、家族の生活環境もよくなった。

VOは20人のメンバーがおり、彼女は13年前から会長をしている。多くの人々がマイクロファイナンスを利用するようになって力をつけ生活ができるようになった。自分もこの機会がなければ2人の子供を育てられなかったと思う。

〈事例G〉

45歳、夫は60歳で農業に従事している。子供は娘が2人と息子が1人で、24歳の長女は修士号を取得後小学校の教師をしている。次女は22歳で英語を専攻する大学生、20歳の長男はパソコン関係の専門学校に通っている。

夫の収入だけでは生活が苦しかったためBRACのノンフォーマル学校の教員をしながら足ふみマシンを持っていたので仕立屋もしていたが、事業の拡大、特に生地仕入れなどのためにマイクロファイナンスを受けたのが最初の経験であった。現在は8万タカを借りて、長屋を作り労働者に貸しており、他に雑貨屋、畜産、不動産などからかなりの収入があり貯金も十分できており、生活は安定している。

マイクロファイナンスを最初に利用したのは2003年で5000タカ借りている。現在では6万タカと、さらに息子のパソコン購入のために4万タカのローンをしている。この間の生活の変化として、子供たちに高等教育を受けさせることができたこと、土地を購入できたこと、そして、経済的に安定したことを挙げている。

BRACのプログラムでは他に、保健衛生、人権教育、園芸や家禽についての講習などに参加している。

将来については、息子にパソコン関係の高等教育を受けさせたいことと、次女がオーストラリアへの留学を希望しているので実現させてあげたいことを指摘した。

VOのメンバーは42名で、その会長をしている。ノンフォーマル学校の教員をした経験もあるので、

村では尊敬される存在である。

〈事例H〉

50歳、夫は55歳で雑貨屋を営んでいる。息子は2人で27歳の長男は病理技師、24歳の次男は学生である。自身は看護師であるが、ダッカで勤務しながら大学も卒業している。また、7年間アフリカのリビアで働いた経験ももつ。

マイクロファイナンスの利用は10年前にさかのぼり最初の額は8000タカで、牛とヤギの飼育業を始めた。現在の借入額は8万8000タカである。

将来は、自身が看護師ということもあり、病理技師である息子と一緒に診療所を開設したいと考えている。

自身はノンフォーマル学校で教えていたが、自分の3人の子供たちは公立の学校に通わせた。20名の会員からなるVOでは会長をしている。高等教育を受け、海外で働いた経験もあるのでVO内だけでなく村の中でもリーダー的存在として、多くの女性たちの相談にのっている。

VII 考察

限られたデータではあるが、解釈を試みる。

1 マイクロファイナンスの利用状況

利用年数は年齢の低い人たち（事例A, B, C）の5年、6年から最長の30年（事例D）まで幅があるが、多くは10年以上と判断される。返済滞納の例についての言及はなく、借入額も回数ごとに順次増加傾向にあることから、ローンの利用方法を経験的に習得し、その後規模を拡大していく傾向がみられる。単に額の大小というよりも最初の借入が少額であってもその完済経験がマイクロファイナンスの活用スキルとして身に付き、計画的な借入へとつながっていることがうかがえる。物質面での生活の向上もそれぞれに明らかである。

インタビュー協力者選定の条件からしてこれは当然のことではあるが、こうした変化を当事者たちがどのようにとらえているかを今後詳細に理解する必要がある。

2 VO との関わり

VOには毎週返済と預金のために集まるのであるが、先に述べたようにVOの役割はそれにとどまるのではなく、さまざまなプログラムが提供される場でもある。マイクロファイナンスだけの参加（事例A, B）もみられるが、年齢的にも若く労働力として家業を優先せざるを得ないと思われる。

その一方、多くが会長、副会長として会の運営に重要な役割を担っている（事例D, E, F, G, H）。また、保健衛生、人権教育、種々の講習にも参加していることがうかがえる。VOの会長、副会長はメンバー全員の生活状況にも気を配り、個人的に相談にのる場合や返済困難なメンバーがいる場合のVOとしての対応など、脱落者を発生させないまとめ役である。メンバーに尊敬されるリーダー的存在という点も共通している。

事例GとHは過去にノンフォーマル学校の教員歴がある。

詳細なプロセスまでは把握できないが、マイクロファイナンスの利用から始まりやがてVOの運営を担うに至る方向は確認できた。今回BRAC側にはインタビュー協力者の選定にあたり一つの条件しか提示しなかったのであるが、マイクロファイナンス利用の成功事例がVOにみるリーダーシップにまで発展していくのか、BRAC側が当該条件だけでなく全体としての成功事例にあたる女性たちを推薦した可能性も一応考慮すべきだが、その実態の理解は今後の具体的課題である。

3 世代関係

貧困状態の改善は日常生活面だけでなく、次世代への機会の拡大という面ももつ。娘の結婚の際にテレビや家財道具を持たせた例も見られるが(事例B)、注目すべき点は教育である。自分の子供はすべて公立学校に通わせたことを挙げている(事例D、H)。さらに専門性の高い高等教育まで受けさせている(事例G)。

BRACのプログラムに参加することを通して、貧困軽減の段階から次世代の社会階層の上昇までがどの程度実現しているかもBRACモデルの検証として重要である。今回の事例からもその可能性は示唆される。この関連で興味深いのは孫をノンフォーマル学校に通わせている事例Cである。現在5回目のローンを申し込む直前でありマイクロファイナンスの利用者としては成功しているとしても、そして、BRACのノンフォーマル学校が内容面で評価されているとしても、親の経済的事情のため公立学校への就学が困難であるか途中脱落状態にあるという条件とは異なり、むしろ経済的には改善されている家庭からの孫のノンフォーマル学校への就学は、強制的に禁止はされていなくともBRAC側は想定していないと考えられる。

4 ローカル・セイフティネットとしてのBRAC事業

8事例と今回の予備調査全体を踏まえての解釈であるが、マイクロファイナンスを利用することの意味はローンの活用により主目的である貧困の軽減だけでなく、それに参加しつづけることが実は生活面全般におよぶ小さなセイフティネットに入っている点にある。例えば、今は忙しく余裕のない事例AやBにしてもBRACのローンを継続利用していくことによりVOで提供されるさまざまな教育プログラムに将来参加でき、BRACの医療保健サービスも利用できるなど、包括的に拡充されるBRACの諸事業の網の目に自然に入っていることにつながる。むしろ、BRACがカバーできるのはすべての領域ではないが、ローカルな規模とはいえ機能的に連携のとれた統合度の高いセイフティネットである。

VIII 結語

筆者は国際援助や社会開発を専門とするものではなく、NGOの活動についても門外漢に等しい。バングラデシュという国との接点は研究計画的にもたらされたものではなく、半ば偶然によ

るものであった。しかし、福祉社会論や高齢社会論の立場から世界最大規模とはいえ一つの NGO である BRAC に出くわしたことは衝撃的といっても過言ではない経験であった。成熟した社会の要件とされる諸要素を BRAC の中にみただけである。

この背景には本稿でもふれたように先進的とされた福祉国家群が持続可能性をめぐる深刻な問題に直面し、研究展開も閉塞化した状況がある。国家の限界が顕在化し、自己責任にも限界がある中で、残された可能性はその中間領域に収斂してきている。公と私、営利と非営利等々の従来機能していた二極原理ではなく、汽水域のようにそれがさまざまにまじりあいながらバランスが図られていくような社会の在り方が構想される必要があろう。

バングラデシュと日本はほとんど対極に位置づけられるのであるが、ことこの課題に関しては我々が BRAC から学ぶべきものは多く、また、日本における実践も相互に共有されるべきである。到達点の比較ではなく、実際に展開しているプロセスの内実の比較が意味をもつのである。

〈註〉

1. 現地調査は2010年度立教大学 AIIC 研究プロジェクト助成による。
2. BRAC の全体的特性の理解には次の文献が有効である。Lovell (1992), Smillie (2009), BRAC Annual Report (2008)。
3. 本節の内容は、2010年8月に行った BRAC 本部におけるヒアリングの結果を含む。
4. 使用した Interview Guide については、章末の〈参考資料〉を参照。

〈参考文献〉

日本語

- 武川正吾 (2007) 『連帯と承認：グローバル化と個人化のなかの福祉国家』 東京大学出版会。
 フレイレ, パウロ (1979) 『被抑圧者の教育学』 (小沢有作訳) 亜紀書房。

英語

- BRAC Annual Report 2008.
 Esping-Andersen, Gøsta. (1990). *The three worlds of welfare capitalism*. Cambridge, Polity Press (『福祉資本主義の三つの世界』 (岡沢憲英・宮本太郎訳) ミネルヴァ書房, 2001年)。
 Holstein, James A. and Gubrium, Jaber F. (1995). *The active interview*, Thousand Oaks, Sage Publications (『アクティヴインタビュー：相互行為としての社会調査』 (山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳) せりか書房, 2004年)。
 Lovell, Catherine H. (1992). *Breaking the cycle of poverty: the BRAC strategy*, Kumarian Press, Inc (『マネジメント・開発・NGO：「学習する組織」BRAC の貧困撲滅戦略』 (久木田由貴子・久木田純訳) 新評論, 2001年)。
 Mishra, Ramesh (1977). *Society and Social Policy*. London; New York, Macmillan.
 ——— (1983). *The Welfare State in Crisis*, Prentice-Hall.
 Smillie, Ian (2009). *Freedom from want: the remarkable success story of BRAC, the global grassroots organization that's winning the fight against poverty*, Sterling, Kumarian Press (『貧困からの自由：世界最大の NGO-BRAC とアベッド総裁の軌跡』 (笠原清監訳, 立木勝訳) 明石書店, 2010年)。

〈参考資料〉

1. Name of the interviewer:
2. Name of the English translator
3. Name of the interviewee:
4. Age
5. Marital status and family composition (those now living together)
-on each member, age, sex, jobs
6. Length of living in this village-since born or since when?
7. years of school education
8. Current Micro-finance loan
 - 8-1 Amount of the current loan
 - 8-2 amount of weekly payment and when paying back completely
 - 8-3 What is she doing with this loan?
 - 8-4 When did she first borrow a micro-finance loan? How did she, and why then?
 - 8-5 How has she changed since then? - such as living conditions, future plan,
 - 8-6 What does she think most important?
9. Other BRAC programs in use - health, non-formal education, legal education, etc.,
10. Is she a member of Village Organization? - her role in the committee, and in the community.
11. In what way has her village changed since BRAC came?
12. Health conditions
 - Did any of your family members get ill recently? Ask the most recent case.
 - What was/were the problem? Diagnosis and treatment
 - How did she cope with the problem, such as taking clinics, getting medicine/treatments, etc.,